

優秀賞

「私たちに課せられた使命」

開智中学校 三年 塚原 晃太郎

私たちの生活は、水によって支えられている。朝、目を覚まして顔を洗い、喉を潤す一杯の水。食事の準備に使い、洗濯や掃除にも欠かせない。お風呂に浸かって一日の疲れを癒し、夜、眠りにつくまで、水は常に私たちのそばにある。しかし、普段何気なく使っている水について、私たちはどれほどのことを知っているだろうか。蛇口をひねれば当たり前のように出てくる水。その源がどこにあるのか、どのようにして私たちの手元に届くのか、考えたことがある人は少ないのかもしれない。

私が水について深く考えるようになったのは、小学生の頃訪れた水源地での体験がきっかけだった。あの日、家族で訪れたのは、山間にひっそりと佇む水源地。車を降り、森の中を歩いていくと、空気がひんやりとし、澄んだ風が肌をなでるのを感じた。木々のざわめきと小鳥のさえずりが心地よく響き、私たちを迎え入れてくれるかのようなだった。しばらく歩くと、目の前に小さな湧き水の池が広がった。その水は信じられないほど透き通っていて底までくっきりと見えた。そばには岩の隙間から絶え間なく水が湧き出し、小さな流れとなつて森の奥へと続いていた。

私は思わず手を伸ばし、水に触れてみた。指先に広がる冷たさが心地よく、なんとも言えない不思議な感動が胸に広がった。地元のガイドの方が、水源について説明してくれた。雨や雪が山の大地に染み込み、とても長い時間をかけて少しずつ地下へと流れ、ようやく湧き水として地表に現れること。そして、その水が川となり、やがて私たちの暮らしを支える水となること。ガイドの方が私に言った「この水は、自然がとても長い年月をかけて生み出した、かけがえのない恵みなんだ。」という言葉が、私の心に強く刻み込まれた。私たちが何気なく使っている水が、こんなにも長い旅を経て、ようやく私たちのもとに届いている。このことに私は深い感動と共に驚きを覚えた。しかし、その後に見た光景は、私に別の衝撃を与えた。水源地から帰る途中の川沿いを通った時のことである。

川の水は濁り、ところどころにゴミが浮いていた。水源地の美しい湧き水とはまるで別のもののように見えた。そのとき、水は自然の恵みで人間を支えているものであると同時に、人間の活動によって脅かされる存在なのだと気がついた。

それ以来、私は、水を使うときに節水や環境への配慮を心がけるようになった。無駄に流しっぱなしにしないこと。洗い物の時も、シャワーを浴びる時も、水の大切さを思い出すようになった。私は、未来を担う世代として、水の大切さを深く認識し、持続可能な社会の実現に向けて行動していきたい。美しい水源地の風景を、田んぼに夕日が反射し、とんぼが空を舞う日本の古来からの風景を、豊かな水の恵みを守り、次の世代へと受け継いでいくために。そのためには、私たち一人ひとりが意識を変え、水の使い方を見返し、環境に配慮した選択を心がけること。そして、水の大切さを周りに伝え、共に行動していくことが必要だと考えられる。

水は、私たち人間、生命にとって必要不可欠である。その恵みに感謝し、大切に守り、未来へと繋いでいくこと。これが私たちに課せられた使命である。